【授業科目】微生物検査学 Ⅱ　Laboratory Microbiology Ⅱ

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
森 啓至	2年次 前 期	必 修	2	30	講 義	あり	巻末 掲載	可

授業概要 (内容と進め方) 及び課題に対する ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ方法	授業概要／微生物学、微生物検査学 Ⅰで学んだ知識をもとにして、各種病原体を含む検体から原因菌を分離・同定するために必要な知識（形態的特徴、培養方法、生化学的性状、滅菌法、消毒法、無菌操作）について教授する。病原体を同定する技術は日進月歩、様々な方法が開発されているが、その基本となる検査方法の原理についても理解できるよう講義する。さらに病原微生物に対して有効な薬剤についても解説するので、臨床検査の場面で遭遇する様々な問題にも対応できる実践力と応用力を身に付けてほしい。 課題に対するﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ方法／提出されたレポートにコメントをつけて返却する。適宜実施する課題については模範解答を解説する。
実務経験に関する 授業内容	大学病院細菌検査室で臨床検査技師としての実務経験を有する教員が、その経験を通して得た知識を織り交ぜながら、微生物に対する基本的な内容から、感染症に関するエピソードなどを交えて講義する。
授業の 位置づけ	本学のディプロマ・ポリシー①「臨床検査の専門性と責務を自覚するとともに、地域に住むあらゆる健康レベルの人々に専門的知識と技術に基づき臨床検査を実践できる。」の達成に寄与している。
到達目標 (履修者が到達 すべき目標)	①各種細菌の生息場所、特徴および病原性を理解するとともに臓器別の感染症の病態について説明することができる。 ②各種細菌の検査方法と同定方法について理解し説明できる。 ③微生物の相違を理解し説明できる。
時間外学習に必要な 学修内容および 学習上の助言	教科書や講義に用いた配付資料等を復習し、要点をノートにまとめること。受講にあたり30分程度の予習と60分程度の復習を行い、講義には積極的に取り組むこと。 ※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（２単位１５回科目の場合：予習+復習４時間／1回）（１単位１５回科目の場合：予習+復習1時間／１回）（１単位８回科目の場合：予習+復習４時間／１回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。

授業計画	第 1回　*Staphylococcus* 属菌の特徴と病原性および検査方法 第 2回　*Streptococcus* 属菌の特徴と病原性および検査方法 第 3回　*Neisseria* 属、*Kingella* 属、*Moraxella* 属の種類、特徴、病原性および検査方法 第 4回　腸内細菌科(*Enterobacteriaceae*)の種類および共通性状、*Escherichia* 属、*Shigella* 属、*Salmonella* 属などの種類、特徴、病原性および検査方法 第 5回　*Escherichia coli*、*Klebsiella* 属、*Proteus* 属、*Yersinia* 属などの特徴、病原性および検査方法 第 6回　ビブリオ科、パスツレラ科の特徴、病原性および検査方法 第 7回　シュードモナス科の種類、特徴、病原性および検査方法 第 8回　レジオネラ科の種類、特徴、病原性および検査方法 第 9回　*Campylobacter* 属、*Helicobacter* 属の特徴、病原性および検査方法 第10 回　*Listeria* 属、*Corynebacterium* 属、*Bacillus* 属の特徴、病原性および検査方法 第11回　抗酸菌(*Mycobacterium* 属) の種類、特徴、病原性および検査方法 第12回　嫌気性菌の特徴と感染症、病原性および検査方法 第13回　スピロヘータ科、マイコプラズマ科、リケッチア科、クラミジア科の特徴と病原性および検査方法 第14回　真菌の分類と特徴および検査法 第15回　ウイルスの分類と特徴および検査法	全て 森
評価方法 評価基準	成績は以下の評点配分によって総合的に判断する。 小テスト40%、　定期試験60%

教科書	『最新臨床検査学講座 臨床微生物学』 医歯薬出版株式会社 （1年前学期「微生物学」で使用するものを使用）	参考書等	「微生物検査ナビ　第2 版」栄研化学 「標準微生物学」　医学書院
学生への メッセージ	本教科は理解すべき事柄に加えて、微生物の名称や培地名など専門用語が多く、それ以外にも微生物の性状など覚える項目が非常に多い。そのため講義後の復習は必須であり、教科書や問題集等を使い繰り返し学習することが大切となります。復習は授業内容を忘れないよう、授業のあったその日のうちに行うことが大切です。		